

著者が語る  
社会調査テキスト

森岡清志

放送大学 特任教授  
東京都立大学 名誉教授

森岡清志編著

『ガイドブック社会調査』

日本評論社

初版1刷

1998年2月

第2版(改訂版)1刷

2007年9月



今は、首都大学東京という据わりの悪い名称となっているが、東京都立大学というわかりやすい名称で呼ばれていた頃、20年以上も前の話である。

二つのきっかけ

当時は講義と学部・大学院の演習のほかに、社会学を専攻する学生の卒論指導を担当していた。学生によってテーマはさまざまであったが、何か調査をして、その結果をもとに卒論を書きたいという学生は毎年少なからず存在した。学生の話聴いていると、彼らの口から時々驚くような言葉が飛び出してくるのである。「ランダム・サンプリングで調査をしたいのですが、渋谷駅ハチ公前を歩きかう人びとにかたづけしから声をかけて話を聴くのも、ランダム・サンプリングになるんですね。何と返答すべきか、しばし呆然とする質問である。「結果をクロス表にまとめる時、やはりエックス二乗検定はしないといけないのでしょうか」。一瞬、レントゲン検査のことを言っているのかと勘違いしそうになった。

学生がランダム・サンプリングを完全に間違っ理解していることはすぐにわかる。同時に、恐ろしい想像が頭をよぎった。サンプリングの基本的意味、母集団の考え方、統計的検定の必要性など、つまり社会調査の基礎の基礎であり、社会学的思考と方法の基礎ともなる知の世界に、この学生はほとんど足を踏み入れることなく卒業を迎えてしまうのか、社会調査関連の講義から学んだものは何もないのかという思いに捉われた。軽い脱力感にひたりながら、心を蝕む想像が広がってしまうのである。カイ二乗をエックス二乗と言ってしまうミスなど、かわいいものに思えてくる。

卒論指導以外の演習でも、似かよったことを経験した。学部2年生を対象に「社会学基礎演習」という必修科目が用意され、4年ごとにこの科目を担当することになっていた。古典に触れるよい機会だと思い、M・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、E・デュルケム『自殺論』など、文庫本で入手しやすい作品を選び、講読していた。ある年、日本の社会科学において評価の高い作品も読んでおく必要があるだろうと思い、これまた入手しやすい新書本の中から丸山真男『日本の思想』を取りあげてみた。

第一章を講読している時、報告担当の学生が何回か「くにぼね」と言うのである。そんな言葉が文中にあったのかと思ったが、ゼミに参加している学生から特に疑問の声はあがらない。確認したところ旧漢字の「國體」を「くにぼね」と読んでいたことがわかった。「この字は、『こくたい』と読むんだよ。」と言ったあとあわてて「『国民体育大会』の略ではなく、この文脈では、天皇が主権者として統治する国家の形態というような意味」と説明を加える必要があった。学生たちの反応をみると、読み方を教えるだけでは「えー、あの国体？」と勘違いしそうにみえたからである。

これらの経験は、社会科学、社会学、そして社会調査に関する知識在庫が学生たちに圧倒的に不足しているだけでなく、知の世界を成立させている諸前提、いわば常識化した幅広い素養とも呼びうるものが、私たちの世代と共有されていない、そのことを痛感させるものであった。社会調査に関する知識を伝える際にも、私たちにとっては当たり前で今更説明する必要もないと思いがちな事柄をあえて採り上げ、ていねいに説明しなければならぬだろう。そのような説明を含む社会調査のガイドブックが必要になってきているなという思いを強めていたことが本書を企画した一つのきっかけとなった。

もう一つのきっかけは、日本評論社の編集者であった金田功さんからもたらされた。それまで都



市社会学の、あまり売れない専門書を「良い本であればじっくり待って少しずつ出してゆけばよいですよ」という言葉に甘えて、何冊か出版させていた。いわば借りがあったのである。その金田さんから「そろそろ少しは売れる本を企画してみませんか」というお話があった。なんとかして信頼する編集者からの要請に応えなければならんと覚悟したことも本書企画の重要なきっかけとなった。少しは売れる本にするために、学生むけのわかりやすいテキストとすることはもちろん、学生以外の市民の方がた、とりわけ調査の企画にたずさわる機会の多い自治体職員の方がたをも読者に想定した、読みやすい入門書を作成してみようと思ったのである。

### 予想外の展開

本書の初版1刷の「あとがき」を、「今回ばかりは、売れる本でもありたいと切に願う心境になっている。」という一文でしめくくった。幸いにも、この願望は期待水準を超えて達成された。短期間ではあるが霞ヶ関の政府刊行物センターに平積みされていたと聞く。自治体職員だけでなく中央省庁の職員の方がたにもお買い求めいただいたようである。予想よりも早い時期に増刷が必要になった。しかし、評判になると思わぬところからのクレームを招くこともある。ある協会から、「『序にかえて』」の中で書かれた、調査会社に対する批判をやわらげてもらえないか、特に全部の調査会社がよからぬことをやっているような印象を与える書き方はぜひとも修正してほしい」という要望が届いたのである。熟慮の末、要望を部分的に受け入れ、2箇所ほど表現を修正することにした。したがって注意して読めば、初版1刷と3刷以降では「序にかえて」7ページ目の表現に若干の違いのある箇所を見つけることができる。さらに改訂版では、調査倫理にも言及する必要から7ページ以降大幅に書き直した。

増刷を重ね、13刷になったころ、金田さんから改訂版を出さないかという嬉しい提案をいただいた。初版刊行から約8年のうちに社会調査をとりまく社会環境は大きく変化していた。これに対応し、また初版本の弱点をカバーするために、そろそろ大幅な修正を施す必要があった。

社会環境の大きな変化の中でも、社会調査に直接に影響する変化として、第一に、住民基本台帳や選挙人名簿抄本の閲覧の大幅な制限、さらに各種名簿の閲覧禁止、これによるランダム・サンプリング実施上の困難の拡大という変化をあげることができる。第二に、社会調査に対するきびしい視線が向けられるなかで、調査を実施する側の倫理規程が今まで以上に鋭く問われるようになったという変化である。これらに対応するための改編を各章で行い、社会調査史に関する補論を付すとともに、社会調査士資格認定機構と日本社会学会の倫理綱領を掲載することにした。

初版本の弱点は多々あったもの特に気になっていたのは次の点であった。それは調査の心構えや、分析に入るまでの説明が少しくどい一方、分析編に相当する章が少なく簡潔に過ぎるという点である。改訂版では、新たに2人の執筆者に参加いただき、2つの章を追加してデータ分析に必要な基礎知識をていねいに説明している。このため、改訂版は初版本に比べて、章の数、ページ数ともに増加し、やや分厚いものとなった。

### 迫りきたる社会調査の危機

社会調査をめぐる環境の変化とともに、社会調査を実施する上でさまざまな困難に直面するケースが増加している。サンプリングにおける困難、実査における困難、そして回収率の低下という問題である。社会学研究者の実施する社会調査が直面している困難は、国の実施する大規模調査が直面する困難と共通の背景を持っている。たとえば国勢調査のような公共性の高い全国調査でも2010年以降、調査拒否世帯の増加がみられ、回収率は低下している。また、調査に協力する世帯でも、職業や学歴に関する枝問には回答しないケースが増えている。このような状況を生み出している背景の一つとして、人びとの公共的領域に対する無関心の拡大という事態をあげることができるだろう。無関心の拡大は、公共的領域への関与の拒否につながり、さらには調査拒否という行動につながりやすい。無関心を縮小し、調査拒否を減少させるためには、本書のように読者の目線に合わせて書かれたテキストが幅広く読まれることも必要になるだろう。